

<第2回日本レジャー・レクリエーション学会賞支援実践奨励賞>

レクリエーション空間整備に関するワークショップ技術の検討とその実践

矢野加奈子<sup>1</sup>

Study and the practice of the workshop technology  
on the recreation space management

Kanako Yano<sup>1</sup>

近年、人々の価値観は多様化し、様々な分野に関心をもたれている。また、人々の関心を集める話題に地球環境問題や国際平和などがある。これらの問題は複雑に絡み合っていて、明快な答えが求められるものではない。

このような問題を解決するためには、従来のように決まった人々が問題について話し合う従来の会議ではなく、誰もがその問題について考え、参加できる新しい形の会議が求められる。そのため、誰もが参加でき、意見を発言し、みんなで創

りあげる、ワークショップ（以下「WS」と略す）形式の会議が注目を集め始めた。

また、近年、住民の地域環境や景観などに対する関心が高まっている。そのため、まちづくりや農村づくりの主体が行政から地域住民へと移行してきた。こうした流れをうけて、都市のまちづくりなどの事業において地域住民が計画に参加し、積極的に意見を発言することが出来るWS形式の会議が多くの自治体で採用されるようになった。WS形式の会議でまちづくりや農山村づくりを行

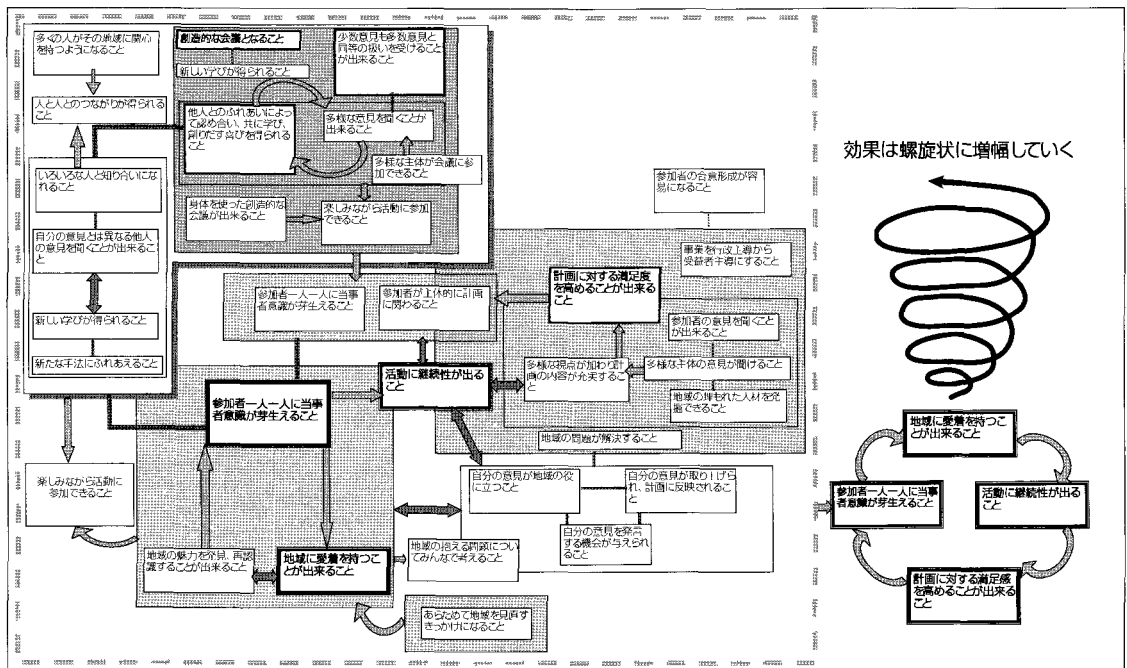


図1 ワークショップ形式の会議に期待される効果

うことで地域住民が地域の魅力を発見し、より愛着を持ってもらえる、活動の継続性につながるなどの効果が期待できる(図1)。また、多くの人にその地域のことを真剣に考えてもらい、主体的に地域に関わる場を提供することができる。

そのため、農山村で行われるWSでも住民が自主性を育み、地域について考え、学ぶ場となることが求められるのではないかと考えられる。また、WSに参加すること自体が地域住民にとって一つのレクリエーションになりうると考えられる。

そこで、様々な地域づくりのWSなどに参加し、実際にWSを行うことでその有用性や、効果について研究するために活動を行ってきた。

私が初めて参加したWSは、農山村における空間計画WSの先進的事例である長野県千曲市にある姨捨(田毎の月)棚田で行なわれている「田園自然環境保全整備事業 姨捨地区」(以下姨捨ピオトープ事業と称す)である。この姨捨棚田は国の名勝にも指定されている地域である。そのため地域住民の地域に対する愛着が強く、みんなで話し合いを行うことで、より地域について広く考えることができるようになった(写真1)。

2006年より石川県輪島市三井町で行っているWSでは、地域の住民より「WSに参加することはレジャーの一つになりうる」という話を聞くことができた。

また、2008年度よりファシリテーターとして参加している神奈川県平塚市のひらつかゆるぎワークショップにおいては、地域住民と里山利用の



写真1 みんなで輪になって話し合う、このWSが私の原点

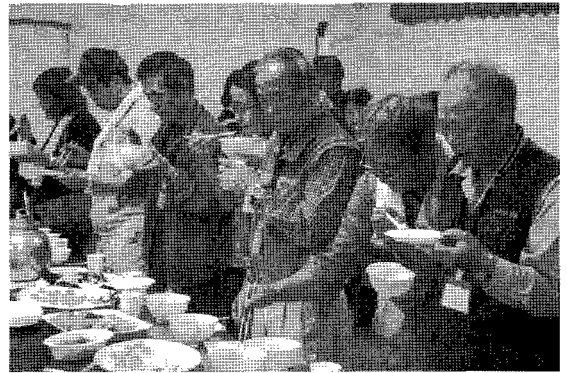


写真2 作業の後の楽しみ 平塚ゆるぎWSより

方法を考え、畑作業などを行ってきた(写真2)。

その他東京農業大学のプロジェクトである「多摩川源流大学」において、学生を対象に地域の魅力を発見するなど多種多様な活動から地域づくりを行うWSを開催してきた。

これらの地域づくりWSに参加して一番感じたのは「人が集い、ともに考え、活動することは楽しい」ということである。もちろんこれらの活動が地域に還元されることは当たり前だが、これらの活動に参加することで地域住民のつながりができ、レクリエーションとして楽しむことができた。

このような活動は継続して続けていくことにこそ意味があると考え。そのため、今回のような賞を受賞したことで、今後もより一層関心が高まり、多くの人に活動に参加していただくことができることを願う。

WSは多くの人々が参加してこそ成り立つものであり、この賞は私一人の力では受賞できなかった、今までWS活動に参加してくれた多くの方に感謝したいと思う。

この賞を励みとして、より一層活動に精進していきたい。

## 引用文献

- 1) 中野民夫、ワークショップ：岩波書店、2001
- 2) 矢野加奈子ほか、農山村における空間計画ワークショップに期待される効果とその構造化に関する研究、レジャー・レクリエーション研究 37、40、4、2007